

京都大学	博士(文学)	氏名	愛 宕 出
論文題目	ロマネスク建築を読み解く — 上からの建築と下からの建築 —		
(論文内容の要旨) 本論文のテーマは、「上からの建築と下からの建築」(「マクロの視点とミクロの視点」「(図面による)全体構想と現場からの建築」「全体から出発する建築と部分から出発する建築)」という図式のもとでロマネスク建築の諸モニュメントの形を読み取ることである。建築は構想→施工という過程を経て実現するが、現実には前もっての構想段階ですべてが決定されるとは限らない。構想が不完全で未決定部分が残されたまま施工に進む場合や施工の途中で変更が生じたりすることがありうる。「上からの建築」という語は前もっての構想ですべてが決定づけられた状態を、「下からの建築」という語は全体の形が不確定なまま施工が進んでいく状態を指す用語として使う。一般的には歴史的建築の解釈はここで言う「上からの建築」という観点から見られることが大半であろう。しかし中世建築では「下からの建築」という側面が多少なりともあり、こうした側面からの考察が不可欠であると考え。本論文は、第一部においてフランス・ロマネスク建築を「上からの建築」と「下からの建築」の相互関係という視点から論じる。第二部においては「下からの建築」という特色が顕著だと考えるイングランドのロマネスクからゴシック開始期の例をとりあげて、具体的に検討する。そして、最後に、中世建築の特質をより大局的な観点から捉えるために、中世思想との形式的類似性について考察する。 第一部 フランス・ロマネスク建築 (上からの建築と下からの建築の相互関係) 第1章 11世紀前半の建築状況 本章においては、フランスのロマネスク建築に見て取れる様式的、技法的不統一、不均質性に着目して、それを施主の意向と施工者の合理主義との間のせめぎ合いとして解釈し、本論文全体の主題を提示する。 1-1 「11世紀前半の北・中部フランスのロマネスク建築」では、北・中部フランスの3建築を対象とする。建築活動の停滞と解されることがある彫刻の劣悪化は、建築家が彫刻をも自己の裁量下に取り入れる過程を示す。また切石が小さくなったり、粗い切石に変わったりする現象は、切石術の厳密さへの執着を捨てて合理化を志向するものであると解釈できる。そして文献記事の欠落は、建築の担い手が聖職者から俗人の建築家に移ったことに起因することが多い。つまりこの時期は現場の合理主義によって建築が推進される段階だと位置づけられる。 1-2 「ベルネー修道院教会」では、このノルマンディ地方のロマネスク最初期の			

建築を取り上げる。ここでは柱の分節要素の石組の検討から、ロマネスク期に発展する分節要素がこの段階では施主側からの意味づけ要素という側面が強く、他方で施主の介入のなくなる身廊では極端な合理主義が現れる。この極端な二元性がノルマンディ・ロマネスクの以後を決定づけることになるだろう。

第2章 ポワトゥー 11 世紀の建築

本章ではポワトゥー地方 11 世紀の建築を二つの視点から論じる。ポワトゥー地方では 1100 年頃に初めて合理化への転換が生じる。従って 11 世紀ポワトゥー地方では北・中部フランスと異なるあり方を見てとることができる。

2-1 「ポワトゥー 11 世紀建築のモニュメンタル彫刻 建築と彫刻の相互関係」では、まず 11 世紀ポワトゥーのロマネスク諸建築に付随する彫刻を、その建築内における配置や石組との関係から観察する。その結果、建築作業と彫刻作業とがどのように関連しながら進行していったのかがわかる。特に彫刻の収まりの悪さや仕上げの不完全さに注目すると、そうした不規則性が建築と彫刻の分業という保守的なあり方に由来すると推察できる。そしてそれを修正すべく様々な試みが見られるが、最後の段階では建築家が彫刻作業をも統率する一本化したシステムを図っていく。

2-2 「11 世紀ポワトゥー建築の空間演出」では、ポワトゥーの建築と彫刻の関係に見られた保守的なあり方が、建築の構想者が非技術畑の出身者だからではないか、という結論に導かれる。おそらくそうした構想者のあり方が、様々な視点からの空間効果を狙った「劇場的」空間構成とつながる。特に床レベルの高低差を使った空間演出は中世初期以来改築を繰り返してきたポワチエ洗礼堂に由来し、中世初期的伝統にある。空間のありかたも現実から隔絶した特権的空間と位置づけうる。

第3章 中世建築のさまざまな側面

本章ではこれまで検討してきた例を中心に、中世建築一般を三つの側面から取り上げ、上からの建築と下からの建築の相互関係というありかたを具体的に示す。

3-1 「中世建築の石組と組積法」では、古代からの石組の変化過程を見る。古代ローマのコンクリート工法は大量の労働力を前提としており、また建築の構想と施工が完全に分離していたと考えられるが、中世においては労働力不足や技術退化により現場で石工が石を切りかつ積むというミクロ面が出発点となる。11 世紀段階の北フランスでは厚い目地の *moyen appareil* が主流だが、これは一方で石工の手積みからの出発により、切石が小さくなり、中世初期の不規則な石組が規則化されるのだと説明できるが、他方で厚い目地は旧来のコンクリート工法への適応を示す、といった過渡期段階と位置づけられる。つまり、マクロとミクロのせめぎ合いだと言える。分節形式は 11 世紀段階では切石の方法に完全に同化されない。1100 年以後になると、壁体分節と切石術が結合し、ゴシックでは分節要素の切石が最重要な問題になるだろう。

つまりマイクロ面からの方法の確立が達成される。

3-2「中世建築における建築と彫刻の相互関係」では、建築と彫刻の関係という視点で見ていく。彫刻は石工の手作業の次元を体現するに対し、建築では手作業の次元に対する全体構想や計画的な建築運営が不可欠である。彫刻と直結する切石術があくまで中世建築の基盤であるが、技術的発展の時期には全体構想・計画的建築運営が優先され、彫刻は簡素化する。施主の関与も難しくなるが、それに対応してかれらは禁欲主義思想・合理主義思想を持ち、建築への関与を意識的に控える傾向が指摘できる。他方、技術的発展期が限界に達すると、建築装飾としての彫刻に重点が置かれる時期が戻ってくる。

3-3「中世建築と幾何学」では、中世建築家の方法である幾何学による形体決定について、ゴシックを中心に幾分抽象的・理論的に考察する。建築構想とは、抽象空間（絶対空間）による構想から出発して身体的空間を形づくるというものだ、という視点で論じれば、中世建築においては、石工の切石作業に伴う身体空間のレベルが基盤であり、幾何学は身体的空間と抽象空間を媒介するものだと言える。ただし中世においては抽象空間の観念が未発達のため、ゴシック後半になると幾何学が媒介性を失い身体的空間の次元が喪失される、という現象が生じる、ということが指摘できる。

第二部 イングランドの中世建築（下からの建築）

第4章 イングランドの諸例

本章では、イングランド・ロマネスクからゴシック開始期まで(1100年頃から1200年頃まで)の3例の教会堂建築を見る。イングランド中世建築では、建設途上で状況に適応して随時構想変更を行うという柔軟さや、建築空間の使用を考慮した現実主義的対応という点で際立っており、そうした視点から分析すると旧来の論の矛盾を指摘して新しい解釈が可能となる。

4-1「ダラム大聖堂の年代論」では、今日まで広く受け入れられている、20世紀初めのビルソン以来の年代論を再検討し、新たな年代設定を提示する。南袖廊は、ヴォールトで構想→途中変更し無ヴォールトで建設→当初案のとおりヴォールトに変更、という経緯をたどるが、これまでこの経緯は財政逼迫と回復という状況の反映である、とされてきた。しかし、これは最初に完成した内陣の聖職者空間（聖歌隊席）が使えるように修道士の通路になる南袖廊を早期に一旦完成させたのだ、と説明できる。続いて建設される身廊については、当初無ヴォールトの構想であったものをヴォールトに変更した、とされてきたが、これも当初からヴォールトの意図があった、と考えられる。つまり、身廊開始部の一見変則的に見える形は、下層の構造を上層へ続けるというやり方が袖廊で桎梏になって作用したため、身廊では上層の建設に際して下層の形の拘束を受けないような処理をした結果である。

4-2「イーリ大聖堂袖廊の建築」では、その一般に考えられている年代設定の矛

盾点を指摘して新説を提示する。聖歌隊席入場は1106年だとされるが、そこへ向かう「修道士入口」彫刻は早くても1120年とされているのである。しかし、ここでは仮の聖歌隊席が（ダラムと同様）東翼に設けられ、南袖廊側廊部がそこへの通路に当たるため南袖廊端側廊が不可欠であった、そして1120年頃によりやく交差部下の聖歌隊席が整えられ、「修道士入口」が同時に建設されたのである。他方、次の時期に入って建設される北袖廊では袖廊端側廊は作られない。ここでは南袖廊端側廊の通路機能が不要になったからであると同時に、工房の交替、あるいは構想変更が起こるのである。イーリ袖廊では、空間使用面での現実主義的な対応をしながら、またそれぞれの時点での状況への適用を繰り返しながら、建築形体を継承して全体を形成していく、というイングランドの中世建築の特徴がはっきり表れているのである。

4-3「カンタベリー大聖堂1174年以後の建築」では、イングランドにフランス・ゴシックを導入するきっかけとなった、この大聖堂の内陣建築を扱う。それについては、同時代文献のかなり詳細な記述により細部までの分析が可能である。この建築は、特に主祭壇空間 *presbytery* 部分においてさまざまな不規則な形を見せている。後に聖トマス・ベケットの聖遺物容器が三位一体祭室 *Trinity Chapel* 中央に置かれることになるが、多くの論者は主祭壇空間の変則的な形を、大聖堂修道院組織のベケット崇拜への姿勢変化に対応する建築構想の変化を示すものだと解釈してきた。本論文ではこうした「イコノグラフィー」的観点をとらない。むしろそうした形をもっぱら建設工事と組織運営の制約から説明していくと、以下の結論に至る。フランス人建築家サンスのウィリアムの統制を逃れたイングランド石工職人の恣意的な形体決定が不規則性の原因であり、最終的にウィリアムもその方向に同調していくのである。

中世建築においては、施主の意向が建築の具体的な形にまで及ぶことは難しい。さらにこの場合のように建築家の意志さえ及ばない不可抗力が形を決定づけることもある、ということになる。

第5章 中世思想と中世建築

本章は、これまで論じてきた中世建築の際立った特徴としての「下からの建築」という側面を、より大局的な言葉で記述し、文化全般のなかで位置づける試みである。中世建築と中世思想の形式的類似性は、思想から建築への直接的影響によるのではなく、同一原理の現れであると理解すべきである。つまりスコラ哲学における信仰と理性というパラダイムに基づく発想と、細部からの構想という建築の方法とが対応している。見えない最終目標（神・建築の完成形体）があり、そのゴールに近づくための手段としての論理学や（建築の）分節的形体が、思想や建築の形式を洗練させていくのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、長年にわたって西洋中世建築の研究に取り組んできた論者が、およそ過去20年の間に発表したロマネスク建築に関する論文に、新たに書き下ろした論考を付け加えて、本論文の題名にある通り、「上からの建築と下からの建築」という視点のもと、全5章に構成したものである。既発表の論文にも、全体にわたって加筆されており、充実した内容の各章は密接に結びついて、ロマネスク建築をめぐる、まとまりのある優れた研究になっている。

中世の建築では、建築期間が長期に及ぶことが普通であり、工事の進行過程で、必要に応じて、当初の計画からの変更が行われたと想像される。図面などによって明確な全体構想を作成した後に工事に着手する現代の建築においても、建築家は、現実の施工過程で技術的な問題に直面したとき、現場でその問題に対処せねばならないが、そもそも前もって明確な全体構想が存在したのかが大いに疑問である中世建築の場合、尚更そうであっただろう。現場の石工の工房の頭領といった職人的建築家が、経験的知識から全体像を探りながら工事を進め、建築の途中で、その続きを考えていくといったあり方が想定できる。論者は、そのような建築のあり方を「下からの建築」と呼ぶ。他方、ルネサンス以降は、前もっての建築家による全体構想が建築を完全に決定づける形が理想とされた。このような建築のあり方が、「上からの建築」である。実際には、なんら全体構想のない「下からの建築」も、また、施工以前の構想がすべてを完全に規定する「上からの建築」も、極端な仮定であり、現実の建築工事は、この両者の間のどこかに位置していたと考えられるだろう。

しかし、論者は、ロマネスク建築の場合には、施主・建築家の意向を直接に反映するよりも、むしろ工事現場で施工する石工の仕事の論理が前面に出てくる場合が多かったと考えている。そして、フランスおよびイギリスのロマネスク建築の諸例を、細部にこだわって、丹念に分析し、そこで作用している建築の論理を解明してみせた。たとえば、第1章において、11世紀前半の北・中部フランスのロマネスク建築を取り上げ、そこで観察される彫刻の質の劣悪化が建築活動の停滞とも見なされてきたことを疑問視し、むしろ、そこでは切石を小さくしたり、粗い切石にすることによって作業を効率化する、建築の合理化への志向が見られるとの見解が出される。その一方で、それとは対照的な例も考察されている。11世紀ポワトゥー地方の建築については、そこに見られる建築と彫刻との間の分業というあり方から、建築の構想が非技術畑の出身者によるのではないかとの結論が導かれ、そのような構想者が、床レベルの高低差を生かした「劇場的」空間構成を生み出したとされる。

また、「下からの建築」と「上からの建築」という枠組みに呼応するように、本論文では、上述のような具体的な建築作例に即した、細部に注目した考察に加えて、より大きな概括的な視点から、「中世建築の石組みと組積法」、「中世建築における建築と彫刻の相互関係」、「中世建築の幾何学」に関する考察が行われている。さらに最終章は、

「中世思想と中世建築」について論じ、「下からの建築」というあり方を、より大局的な視点から捉えようとする非常に大胆な試みを行っている。これらの論考も、もちろん、非常に興味深い。しかし、なんと言っても本論文の最も優れた部分は、具体的事例に関する詳細な考察である。

ロマネスクの教会堂建築に見られる統一性と規則性を欠いた、非合理的とも思われる建築過程が、実は、建築空間の使用目的に応じた現実主義的対応であり、長期にわたる建築工事において生じる新たな状況に対応した、合理的な判断の結果であることを顕著に示す例として、論者は、第4章において、イギリスの3例の教会堂建築を分析している。なかでも、20世紀初頭にビルソンが呈示し、近年に至るまで広く受け入れられてきた、ダラム大聖堂の建築過程と年代に関する通説を否定し、論者が新説を展開した考察はとりわけ見事である。

ダラム大聖堂の建築は、東内陣から西に向かって進行したが、その工期は大きく二つに分かれる。袖廊については、最終的に南北両方がヴォールトを持つことになるが、北のヴォールトが第1期に属するのに対し、南のヴォールトは第2期に架されていて、最初は、ヴォールトなしの、木骨天井で覆われていた。このような南北の袖廊の天井の相違を、ビルソン、ならびに近年その説の修正を試みたサールビーのいずれもが、建築途上の財政悪化が原因であると考えた。しかし、内陣の中央ヴォールトの完成年との関連を考慮に入れたとき、このような著しい非対称、アンバランスな形態を、単に財政悪化という事実から説明するのには無理がある。そこで、論者は、南北の袖廊の天井の相違は、財政の困窮によるのではなく、建築の進行に伴い使用可能となった聖歌隊席への通路に当たる南袖廊部分を、当初予定されていたヴォールトから木骨天井に変更することで、その完成を早めたからであるという、非常に説得力のある説を出した。つまり、この南北の天井の形態の相違は、通路を確保するために南袖廊の工期を縮めるという意図に基づく変更であり、それゆえに、第2期に至って、身廊部分に聖歌隊席への入り口が確保できたときに、南袖廊部分にもヴォールトが架けられたというのである。もっとも、後にヴォールトを架す予定であれば、仮の木骨天井にした段階で、高窓層をヴォールトを想定した形に作ればよいのだが、そうはなっていない。それは、なぜなのか。論者は、それについては、建築家あるいは施主が不用意であるとしか言いようがなく、このような構想段階でのあいまいさ、長期的な構想の欠如がイングランド的な特色であるとする。数多くのロマネスク建築の作例を、驚くべきほどに詳細に観察してきた論者ならではの奥深いコメントである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2012年12月18日、調査委員3名が、論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。